

共同研究の目的と概要

1. 共同研究の背景ならびに目的

鴻池善右衛門家は大阪・今橋に本拠を構えた両替商である。もとは摂津国伊丹郷で清酒醸造を手がけ、近世初期に大阪へ進出した。はじめ大阪内久宝寺町（現在の大阪市中央区）に拠点を構えた鴻池善右衛門^{まさしげ}正成（1608～1693）は、伊丹で父の新六^{しんろく}幸元^{ゆきもと}らが醸造した清酒を樽廻船で江戸へ送る廻船業を創業し、明暦2年（1659）には両替店へと事業進出を果たした。延宝2年（1674）に今橋へと転居してこの地を本拠とし、本格的に両替・蔵元・掛屋・大名貸などの事業を展開した。

鴻池善右衛門家に伝来した資料群が大阪市へと寄贈されたのは、平成7年（1995）1月に発生した阪神・淡路大震災を契機とするもので、当時の当主であった十四代鴻池善右衛門氏が同家伝来の文化財を永く未来へと伝えるため、同家ゆかりの3都市（大阪・京都・東大阪）の博物館施設に寄贈することを決したことによる。大阪市へは平成8年から9年（1996～7）にかけて、590件3,300点を超える大規模な寄贈を受けた。以来、大阪歴史博物館では鴻池家や同家伝来の資料に関する調査や研究、展示をおこなってきたところである。

ところで、かつて鴻池家が所蔵していた美術品や茶道具は各地で開催される展覧会に出品されるほどよく知られた収集品であった。しかしながらそれらの収集品の多くは、昭和15年（1940）、「松筠亭藏品」として売立てられた。そのため、阪神・淡路大震災まで鴻池家に伝来し、大阪市へと寄贈された作品群は、大阪今橋の本邸で使用された生活用品が中心であり、鴻池家の生活や文化の理解を深める上で欠くことのできない品々ということができよう。また、一連の寄贈品のなかに多数の染織文化財が含まれていたことは既述のとおりである。

鴻池家伝来の染織文化財は鴻池家本邸で使用されていた衣装類とその他の染織品（以下、寄贈裂類とする）に分類することができる（下記に分類を示す）。今回の調査研究は（2）のその他の染織品（＝寄贈裂類）を対象とし、全作品の悉皆調査をおこなうとともに必要な修復作業を実施することを目的としている。

- 染織文化財
- (1) 服飾類
 - ①男性物—上下類、小袖類（熨斗目、羽織類）洋装関係品
 - ②女性物—小袖類（振袖、小袖）
 - (2) その他の染織品（＝寄贈裂類）
 - ①茶の湯関係裂（仕覆解袋など）
 - ②反物（おもに輸入裂）
 - ③袱紗・服地の端切れなど

2. 研究期間 平成 27 年度から 29 年度末まで

3. 研究担当者

公益財団法人 五島美術館 主任学芸員 佐藤留実氏

大阪歴史博物館 主任学芸員 中野朋子

4. 活動の概要

下記のとおり、寄贈裂類の悉皆調査を実施するとともに、第3回調査時には、「時代裂の魅力—鴻池家伝来染織品の位置づけを中心に—」と題する講座を開催し、調査成果の一部を一般に向けて発表した。

平成 28 年（2016）2 月 第 1 回調査実施

平成 28 年（2016）9 月 第 2 回調査実施

平成 29 年（2017）12 月 第 3 回調査実施ならびに調査成果の一部を発表



調査風景

5. 特集展示「鴻池研究の現在」に関する報告

平成 27 年度からおこなってきた調査・研究、修復の成果を踏まえ、大阪歴史博物館第 115 回特集展示「鴻池研究の現在」を企画、成果の一部を展示した。特集展示の概要は次のとおりである。

会期：平成 29 年（2017）11 月 15 日（水）から 平成 30 年（2018）1 月 8 日（月・祝）まで
火曜日および 12 月 28 日（木）～1 月 4 日（木）は休館

会場：大阪歴史博物館 8 階 特集展示室

担当学芸員：中野朋子（当館学芸員）

本展は、鴻池善右衛門家からの寄贈が 20 周年を迎えたことを契機に、大阪歴史博物館が進めてきた鴻池研究の成果を振り返るとともに、今後の課題を探るために企画された。同時に、一連の鴻池家伝来染織品の調査成果を初公開し、その歴史的価値と魅力について紹介した。展示内容の詳細については、特集展示リーフレット（9～12 ページ）、出品リスト（13～14 ページ）を掲載するので参照してほしい。

※特集展示のリーフレットならびに同展の出品リストに掲載される作品名および時代等の表記は、特集展示開催当時のものである。展示終了後の再検討によって変更されている点があるが当時の記録として訂正を施さずに掲載する。

関連行事として下記を開催した。

①学芸員による展示解説

日時：平成 29 年（2017）12 月 2 日（土） 午後 2 時から

担当：中野朋子（当館学芸員）

②関連講座「時代裂の魅力—鴻池家伝来染織品の位置づけを中心に—」（事前申込制）

日時：平成 29 年（2017）12 月 9 日（土） 午後 2 時から午後 4 時

講師：佐藤留実氏

中野朋子

③体験型学習

（1）ちょびっと体験「“織りもの”のしくみ」

織りものは、身近な存在でありながら、自分で織るのは難しいというイメージもある。そこで、はがき大の厚紙と毛糸を使い、簡易な織りものづくりを体験することとで織物への理解を深めるワークショップを開催した。

開催日時：平成 29 年（2017）11 月 25 日（土）

（1 回目）午前 11 時から 12 時

（2 回目）午後 2 時から 3 時

（3 回目）午後 3 時 30 分から 4 時 30 分

会場：大阪歴史博物館 8階 特集展示室内

参加費・定員：無料、各回 12 名程度

担当：中野朋子

(2) ちょびっと学習「“模様”でつくるポストカード」

展示中の鴻池伝来の染織品の模様をもとに製作したスタンプを押してポストカードをつくるワークショップ。スタンプあそびを通して難しいイメージのある染織の模様への理解をやその意味について、学習を促した。

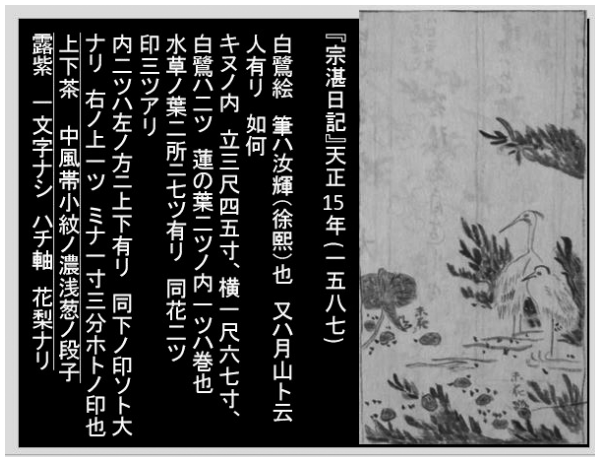
開催日時：平成 29 年（2017）12 月 23 日（土・祝）午後 2 時から 4 時

会場：大阪歴史博物館 8階 特集展示室内

参加費：無料

担当：中野朋子

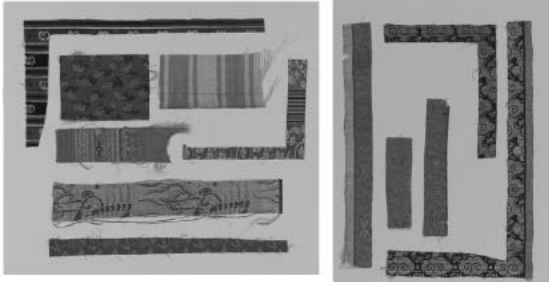
関連講座「時代裂の魅力—鴻池家伝来染織品の位置づけを中心に—」においては、外部研究員の佐藤留実氏より「鴻池コレクションから考える松屋名物」と題して、今回の調査研究によって鴻池家伝来裂類のなかから新たに見いだされた清朝などの貴重な渡来織物、なかでも「珠光段子」の付箋を貼付されて伝来した「濃縹地雲宝尽文緞子」を巡る新知見の概要が報告された。報告の内容については本報告書掲載「佐藤留実「濃縹地雲宝尽文緞子（珠光緞子）」と松屋名物鷺絵について」（38～47 ページ）に詳しい。



佐藤氏報告より抜粋

同講座において中野からは「両替商・鴻池善右衛門家と染織品の蒐集について考える」と題して鴻池家の歴史と染織品蒐集の背景について報告した。

鴻池善右衛門家からの寄贈品には
多くの染織品が含まれていた



裂類について記録した文書に
アプローチする

「明治三十五年 八番蔵道具出入扣 執事」
(鴻池合資会社資料室蔵)

明治四十年^{※1} 四月十九日
東文庫
一裂鑑^{※2} 筆筒小 沓棹
右瓦別邸^{※2} 江本日より来訪之井上伯^{※3} へ御一覽之為出ス
立会開庫 芦田^{※4} 支配人 平井執事

※1 1907年
※2 鴻池家の瓦屋機別邸
※3 鴻池家および事業を監督した井上馨(1836~1915、号:世外)
※4 鴻池銀行の理事兼支配人、芦田順三郎

中野報告より抜粋

(中野朋子)

特集展示

鴻池研究の現在

平成29年(2017) 11月15日[水]～平成30年(2018) 1月8日[月・祝]

【休館日】火曜日、12月28日[木]～1月4日[木]

鴻池善右衛門家は大阪に本拠を構えた両替商です。もともと伊丹において酒造を手がけていた鴻池家は、元和2年(1616)に大坂内久宝寺町へ進出、延宝2年(1674)には今橋へと転居して本格的に両替・大名貸を展開しました。

伊丹で清酒の醸造を始めたのは、ちょうど関ヶ原の合戦があった慶長5年(1600)ころです。大坂夏の陣で豊臣家が滅んですぐ、元和2年(1616)には大坂の内久宝寺町でも酒造りをはじめました。



始祖 新六



十一代 幸方

明治17年(1884)に、父の十代幸富の跡を継ぎました。変化の激しい時代を生き抜くため、銀行を設立するなど事業の安定に力を尽くしました。明治44年(1911)8月に住友吉左衛門さん、藤田伝三郎さんと一緒に政府から「男爵」の位をいただきました。



初代 正成

私は父・新六とともに大坂へ出てきました。造った酒を江戸に運ぶために海運業をはじめたのが寛永2年(1625)です。両替屋を開業したのは明暦2年(1656)のことでした。

鴻池家の歴史を知る



五代 宗益

父・宗貞の跡を継いだのは享保8年(1723)、7歳の時でした。家業の両替屋は安定した経営になっていたので、親類の道徳さや父と一緒に茶の湯に力を入れて、「名物」の道具や「名物裂」をたくさん集めました。



二代 之宗

寛文3年(1663)に父・正成の跡を継ぎ、寛文10年(1670)に十人両替の制度ができた際には、私も列せられました。延宝2年(1674)には今橋2丁目に屋敷を購入して両替店を移しました。

父である三代宗利の跡を継いだのは宝永2年(1705)。私はまだ8歳でした。同じ年、父とともに鴻池新田の開発をはじめ、2年後に完成させました。享保14年(1729)には、京都四條に屋敷を構えました。

四代 宗貞



鴻池道億



親類の道徳です。良い茶道具を集めるには「目利き」が大切です。

※四代宗貞像ならびに鴻池道億像は鴻池合資会社資料室蔵
その他の肖像ならびに木像は鴻池家蔵

鴻池家伝来の染織品を 研究する

鴻池善右衛門家に伝来した資料群が大阪市へと寄贈されたのは、平成7年(1995)1月に発生した阪神・淡路大震災をきっかけとするものでした。当主の鴻池善右衛門氏が、同家伝来の文化財を永く未来へと伝えるため、同家ゆかりの3都市(大阪・京都・東大阪)の博物館施設に寄贈することを決し、大阪市へは平成8年から9年(1996~7)にかけて590件3,300点を超える資料が寄贈されました。以来、大阪歴史博物館では鴻池家や同家伝来の資料に関する調査や研究をおこなってきました。今回はその一環である鴻池家旧蔵染織品の調査研究について紹介します。



①



②



③



④



⑤



⑥



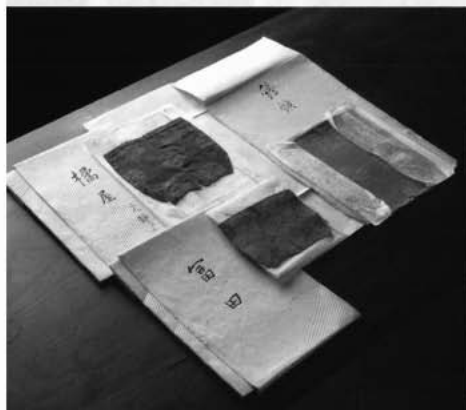
⑦

① 青地描絵花文様裂(部分)(19~20世紀) ② 虎ノ紋織子仕覆裂(16~17世紀) ③ 人形手紹巴裂(唐子、部分)(18~19世紀)
④ 緑地紬地裂(18世紀) ⑤ 白地紬地裂(19世紀) ⑥ 文様織子裂(16~17世紀) ⑦ 笹蔓手金更紗裂(17世紀)

すべて大阪歴史博物館蔵(鴻池善右衛門氏寄贈)

五代宗益が収集した名物裂と裂簞笥

「裂簞笥」とは「名物裂」と呼ばれる染織品(多くは茶の湯の染織品)を収納・保管する簞笥のことです。この名物裂簞笥は、鴻池家五代当主の宗益が収集に関わったと考えられるもので、87件の名物裂を収納しています。昭和7年(1932)には同家の「家宝」として昭和天皇にも天覧されました。



一種ずつ畳紙に包まれ
裂簞笥に納められた名物裂

写真右から時計まわりに
鶏頭金襴(元~明時代 14~15世紀)
富田金襴(明時代 15世紀)
橘屋金襴(元~明時代 14~15世紀)
(すべて個人蔵)



裂簞笥(個人蔵)

写真撮影:小林正和 写真提供:株式会社 淡交社

加湿処置法による染織品の修復工程

① 調査



修復前の作品状態を入念に調査・記録する

② 加湿



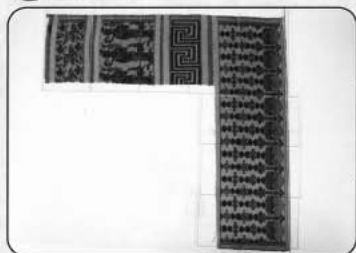
作品を作業台の上に並べる



全体を防水浸透性(※)が高い素材でおおう

※ 防水浸水性とは、
水は通さないが
水蒸気は通す性能のこと

③ 押し



加湿終了後、しわや折り目を
ひろげアクリル板で押さえる



乾燥防止のためにビニールでおおい、
一定時間置く



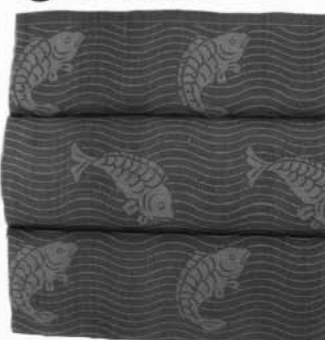
水蒸気で加湿するためにおおいの上から
濡れタオルを重ねる

④ 乾燥



アクリル板のすき間を徐々に
ひろげながら十分に乾燥させる

⑤ 修復完了



修復前



修復後

荒磯緞子(17～18世紀) 大阪歴史博物館蔵(鴻池善右衛門氏寄贈)

写真提供: 共立女子大学 家政学部 被服平面造形研究室

鴻池家旧蔵染織品は長年の保管によって「折れ」などが生じており、これらの部分から新たな損傷を生じかねない状態でした。そのため大阪歴史博物館では、2017年に共立女子大学への委託研究「鴻池家伝来古裂の修復に関する研究」によって26点の染織品の修復を行いました。

修復技法は染織品にゆっくりと湿り気を与えたうえで「折れ」などの部分に重しを置き、時間をかけて平らな状態に戻す「加湿処置法」を採用しました。修復の結果、それぞれの染織品の「折れ」などは取り除かれ、より安定した状態で保存・活用することが可能となりました。

鴻池家伝来の
染織品を
保存する

研究・展示して活用する

かつて鴻池家が所蔵していた美術品や茶道具類は各地で開催される展覧会に出品されるほどよく知られた収集品でした。それらは戦争色が日に日に強まる昭和15年(1940)、「松筠亭蔵品」として売立てられ全国の美術品愛好家の手に渡りました。

他方、阪神・淡路大震災まで鴻池家に伝来し、のちに大阪市・東大阪市・京都国立博物館へと寄贈された作品群は、大阪今橋の本邸や東大阪市の鴻池新田会所で使用されたものがほとんどで、鴻池家の生活や文化の理解を深める上で欠くことのできない品々です。大阪歴史博物館では、寄贈を受けたさまざまな作品について、総合的・横断的な調査研究をおこない展示に活用することで、新しい鴻池研究をはじめています。

これらの皿はともに19世紀にオランダ南東端部の都市・マーストリヒトのペトルス・レグー(Petrus Regout)窯で焼かれた陶器で「オリエンタル」と呼ばれる銅版転写(プリントウェア)のシリーズです。

上の作品は鴻池家に10枚一組で伝来した品で、ほとんど使用痕もありません。下は平成22年(2010)度の発掘調査によって、大阪市北区西天満の佐賀藩蔵屋敷跡から出土したものです。一見同じようにみえる皿ですが、詳細に比較してみると皿の中央部分の模様や縁の加工方法などが異なることがわかります。

それぞれの皿が大阪へ運ばれた経緯や流通などについては不明な点も多く、今後、オランダの銅版転写(プリントウェア)がどのように受容されたのかについて調査研究を進める上でも、注目される2作品です。



マーストリヒト・ペトルス・レグー製皿(19世紀)
大阪歴史博物館蔵(鴻池善右衛門氏寄贈)



マーストリヒト・ペトルス・レグー製皿(19世紀)
大阪市北区西天満2丁目 佐賀藩蔵屋敷跡出土
(大阪文化財研究所保管)

特集展示 鴻池研究の現在

◆ 関連行事

- ① 関連講座「時代裂の魅力—鴻池家伝来染織品の位置づけを中心に—」
平成29年12月9日(土) 午後2時～午後4時
講師：佐藤留実氏(五島美術館 学芸員、当館外部研究員)、
中野朋子(大阪歴史博物館 学芸員)
会場：大阪歴史博物館 4階 第1研修室
定員：60名(事前申込制。詳細は当館HPでご確認下さい。)
 - ② 学芸員による展示解説：平成29年12月2日(土) 午後2時より30分程度
 - ③ ちよびっと体験「織りもの」のしくみ：平成29年11月25日(土)
(1回目) 午前11時～12時 (2回目) 午後2時～3時
(3回目) 午後3時30分～4時30分
定員：各回12名程度(受付は各回15分前から)
 - ④ ちよびっと学習「模様」でつくるポストカード
平成29年12月23日(土・祝) 午後2時～4時
- ※②～④はいずれも講師は展示担当学芸員、
会場は大阪歴史博物館 8階 特集展示室内、
参加費は無料(常設展示観覧券が必要)、
参加希望の方は当日直接会場へお越し下さい。

- 会場 大阪歴史博物館 8階 特集展示室(常設展示場内)
(最寄駅) 地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」駅 ②号・⑨号出口
大阪市営バス「馬場町」バス停前
- 会期 平成29年(2017)11月15日(水)～平成30(2018)年1月8日(月・祝)まで
[休館日] 火曜日、12月28日(木)～1月4日(木)
- 開館時間 午前9時30分～午後5時 ※入館は閉館の30分前まで
常設展示観覧料でご覧になれます。
- 観覧料 大人600円(540円)、高校生・大学生400円(360円)
※()内は20名以上の団体割引料金
※中学生以下・大阪市内在住の65歳以上(要証明提示)の方、
障がい者手帳等をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料
- 展示担当 中野朋子



大阪歴史博物館

Osaka Museum of History

〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32

TEL 06-6946-5728 FAX 06-6946-2662

<http://www.mus-his.city.osaka.jp/>

特集展示「鴻池研究の現在」出品リスト

出品番号	展示作品	所蔵先
写真パネル	初代鴻池善右衛門正成・種木像	鴻池家
写真パネル	始祖鴻池新六	鴻池家
写真パネル	二代鴻池之宗	鴻池家
1	四代鴻池宗貞	鴻池家
2	五代鴻池宗益	鴻池家
3	鴻池道億肖像	鴻池家
4	中井履軒筆鴻池稲荷碑文拓	大阪歴史博物館
5	浪華持丸長者控 文政8年	大阪歴史博物館
写真パネル	十一代鴻池善右衛門幸方肖像	鴻池家
写真パネル	『大阪大観』より 男爵鴻池家本邸	大阪歴史博物館
写真パネル	『大大阪画報』より 鴻池銀行本店全景および貸金庫入口	大阪歴史博物館
6	井上馨像	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
7	〔刊行物〕松筠亭入札目録	大阪美術倶楽部編、個人蔵
8	コーヒーカップ 永楽善五郎作	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
パネル	系図	大阪歴史博物館作成
パネル	略年表	大阪歴史博物館作成
パネル	地図	大阪歴史博物館作成
9	〔刊行物〕臨幸記念 名家秘蔵品展覧会図録（第一回、第二回）	大阪商工協會ほか編、藝苑社発行
写真パネル	鴻池家伝来裂筆筭	個人蔵
参考出品	〔刊行物〕特別展 名物裂 渡来織物への憧れ	五島美術館学芸部編、五島美術館発行
参考出品	〔刊行物〕淡交別冊 仕覆の愉しみ 再発見、茶道具を包む袋物	淡交社発行
10	荒磯緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
11	荒磯緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
12	仕覆裂 寄金（紺地）	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
13	仕覆裂 寄金（緑地）	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
14	金茶地双鳥蝶文紹巴	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
15	金茶地人物鳥文錦	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
16	人形手紹巴	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
17	人形手唐錦	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
18	人形手紹巴	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
19	人形手紹巴	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
20	牡丹唐草文紹巴袱紗	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
21	紹巴裂	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
22	古裂（小片）	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
23	古裂（小片）	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
24	紹鷗間道	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
25	虎之文古緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
26	雲龍文銀襦袢裂	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
27	紬地	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
28	和久田手金襴	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）

出品番号	展示作品	所蔵先
29	唐草緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
30	紋海気	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
31	青地描絵花文様裂	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
32	深緑地雲宝文緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
33	青海波に鶴の紋金襴	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
34	縞に花唐草文緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
35	紺地花唐草文緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
36	龍鳳凰文錦	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
37	白地柘榴文紗	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
38	珠光緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
39	格天井更紗	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
40	薩摩間道	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
41	笹蔓手金更紗	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
42	唐草緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
43	青鼠地双龍文緞子	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
44	龍鳳凰文錦	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
45	紺地打裂羽織	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
46	紅地流水に遠山桜文刺繍振袖	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
47	茶地松皮菱取りに秋草文刺繍小袖	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
48	紋付耳盥	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
49	紋付御歯黒道具類	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
50	紋付鏡掛および鏡・鏡箱	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
51	紙子羽織	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
52	薄墨地松秋草に牛文染縫打掛	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
パネル	伝来裂の修復工程	共立女子大学家政学部被服平面造形研究室提供
参考出品	鴻池家萬日記	大阪歴史博物館
53	染付菊文中皿 大明成化年製	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
54	[出土品] 住友銅吹所跡出土資料	大阪文化財研究所保管
55	マーストリヒト・ベトルス・レグー製皿	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
56	[出土品] 佐賀藩蔵屋敷跡出土資料	大阪文化財研究所保管
参考出品	[刊行物] 豪商鴻池—その暮らしと文化—	大阪歴史博物館編、東方出版発行
参考出品	[刊行物] KIMONO OSAKA' S GOLDEN AGE	大阪歴史博物館編、 Immigration Museum, Victoria 発行 (Australia)
参考出品	[刊行物] 鴻池コレクション（資料集）	大阪歴史博物館編、発行
参考出品	[刊行物] 鴻池男爵家蔵 扇面画譜	恩賜京都博物館編、芸艸堂発行
57	舞扇	大阪歴史博物館（鴻池善右衛門氏寄贈）
参考出品	[刊行物] 扇絵名品展 鴻池コレクション	大阪市立美術館編、 大阪市立美術館・日本経済新聞社発行
参考出品	[刊行物] 山上印と五つ山紋	東大阪市文化財協会編、 国史跡・重要文化財鴻池新田会所発行
参考出品	[刊行物] もてなしの道具	東大阪市文化財協会編、 国史跡・重要文化財鴻池新田会所発行

鴻池家略年表

年		できごと	善右衛門家当主
慶長 5	1600	この頃、始祖幸元が清酒の醸造を始めるという	
元和 2	1616	この頃、始祖幸元が大坂内久宝寺町で清酒の醸造を始めるという	
寛永 2	1625	初代正成、海運業を始める	初代 正成
明暦 2	1656	両替商を開業するという	
寛文 9	1669	算用帳の記帳始まる（寛文十年一月に決算）	二代 之宗
寛文 10	1670	十人両替の制度が確立し、鴻池喜右衛門（二代之宗）も列せられる	
延宝 2	1674	今橋 2 丁目に屋敷を購入し、両替店を移す	
宝永 2	1705	鴻池新田の開発を始める（宝永 4 年に竣工）	三代 宗利
宝永 5	1708	「鴻池新田」の名称を許される	四代 宗貞
享保 8	1723	「家定記録覚」を定める	五代 宗益
享保 9	1724	妙智焼けにて、今橋本邸など類焼	
寛保 3	1743	京都玉林院に山中鹿介の碑を建立	
寛政 4	1792	大火により今橋本邸焼失	六代 幸行
文化 12	1815	草間直方『三貨図彙』を著す	八代 幸澄
天保 8	1837	大塩平八郎の乱により今橋本邸など焼失	九代 幸実
明治 6	1873	第三国立銀行の設立を出願するが、開業にいたらず	十代 幸富
明治 9	1876	第十三国立銀行を開業	
明治 16	1883	大阪倉庫株式会社を設立	
明治 22	1889	鴻池家憲法を制定	十一代 幸方
〃	〃	日本生命保険会社を創立し、十一代幸方社長となる。	
明治 23	1890	大阪貯蓄銀行の創立に参加し、幸方頭取となる。	
明治 30	1897	第十三国立銀行満期平穩閉店し、鴻池銀行を設立してこれを継承する	
明治 44	1911	十一代幸方、男爵を授かる。	
大正 14	1925	今橋 3 丁目に鴻池ビルヂング落成、鴻池銀行入居	十二代 幸昌
昭和 7	1932	昭和天皇、陸軍大演習に伴う大阪行幸に際して鴻池家家宝の名物裂を天覧	
昭和 8	1933	鴻池・三十四・山口の三行が合併し、三和銀行となる	
昭和 15	1940	所蔵美術品の一部を「松筠亭藏品」と称して美術倶楽部にて入札	
平成 7	1995	阪神大震災発生。鴻池家居宅も甚大な被害を受ける	十四代 統男
平成 8	1996	所藏品の一部を大阪市、東大阪市、京都国立博物館へ寄贈（～平成 9 年：1997）	
平成 15	2003	大阪歴史博物館にて特別展「豪商鴻池－その暮らしと文化－」が開催される	
平成 22	2010	大阪歴史博物館にて特別展「華やきの装い－鴻池コレクション展－」が開催される	
平成 29	2017	大阪歴史博物館にて特集展示「鴻池研究の現在」が開催される	

『豪商鴻池－その暮らしと文化－』展図録（大阪歴史博物館編）掲載年表に加筆した

鴻池家歴代当主

代	名	生没年	家督	主な号	系統	事績
始祖	新六幸元	1570 ～ 1650				
初代	善右衛門正成	1608 ～ 1693		宗信	始祖新六の子	始祖幸元の子として伊丹に生まれ、寛永16年（1639）頃大阪へ進出し、主に伊丹の酒を江戸に送ったという。兄弟らの影響で一時茶の湯を始めたものの長くは続けなかったという。その人物像は豪放磊落と伝わる。
二代	喜右衛門之宗	1643 ～ 1697	寛文3年 (1663)	了信	初代正成の子	金融事業へ本格参入、寛文10年（1670）の十人両替制度の確立とともにそこに列した。延宝2年（1674）に今橋二丁目難波橋筋角を入札で買収し両替店を移転、のちにこの場所に本拠を移す端緒となった。また、天和2年（1682）には初代正成とともに初めて土佐藩主・山内豊昌（1641～1700）にお目見えを果たしている。
三代	善右衛門宗利	1667 ～ 1736	元禄8年 (1695)	宗誠	二代之宗の子	元禄年間までに鴻池家は名実ともに大阪を代表する両替商へと成長した。大坂進出以来本拠とした内久宝寺町から今橋へと本邸を移し、内久宝寺町屋敷は本地と呼称するよう定められた。同時に酒造を廃し金融および不動産に事業の主軸を移す。鴻池家では本邸・本地のほかに、瓦屋橋に広大な回遊式の園池と茶室を持つ別邸を所有した。宝永元年（1704）の大和川付け替え工事ともなう河内国若江郡の新開池の新田開発が翌宝永二年（1705）に始まると三代宗利は四代宗貞を名義人として着手、宝永四年（1707）に工事を完了した。これがのちの鴻池新田で、その開発の総面積は250町（250ヘクタール）に及んだ。
四代	善右衛門宗貞	1698 ～ 1745	宝永2年 (1705)	宗羽 継塵斎 了瑛	三代宗利の子	宝永2年（1705）、八歳で家督相続。享保9年（1724）3月21日、大坂で「妙知焼け」がおこり、鴻池家の今橋本邸は全焼した。表千家覚々斎原叟・如心斎天然に師事して茶の湯に親しみ、大徳寺玉林院の大龍宗丈、同族の道徳とも交流して多くの道具を蒐集した。
五代	善右衛門宗益	1717 ～ 1764	享保8年 (1723)	宗知 利永 吸江軒 思遠斎	四代宗貞の子	父・宗貞同様茶の湯を好み、大徳寺玉林院に如心斎の好みで牌堂「南明庵」・茶席「養庵」「霞床席」（重要文化財）を建立した（寛保2年・1742）ほか、瓦屋橋別邸に自身の好みで七畳半の茶室を設えるなどしている。娘の辰に分家させ山中善作家を創立、このとき鴻池家が蒐集した多くの道具類が散逸したとも伝わる。
六代	善右衛門幸行	1744 ～ 1795	宝暦6年 (1756)	雅好 無尽斎	四代宗貞の子	分家の善作家継承のため養子となっていたがのちに本家に戻されて後継となった。鴻池家立て直しに尽力し、散逸した道具類の買い戻しにも努めたという。鴻池家の道具管理の基本台帳となった「寛政三年道具改帳」は幸行の代に整えられたもの。
七代	善右衛門幸栄	1767 ～ 1804	寛政7年 (1795)	有忍斎 嘯月	六代幸行の子	京都で養育されたといい、文芸にも関心を寄せていたらしい。大阪市へ寄贈された服飾品のなかに、幸栄が狂言で役見を務めた際に着用したとされる素襖袴と烏帽子が伝来している。「寛政の定め」を制して家業の引き締めにあたった。
八代	善右衛門幸澄	1785 ～ 1834	文化元年 (1804)	春嶽 自集軒	六代幸行の子	諸大名の蔵元や掛屋、大名貸を中心としていよいよ安定した経営を行っていく。文化年間以降、天災と飢饉を背景に、幕府御用金の下命が続くようになった。五十歳にて逝去。
九代	善右衛門幸実	1806 ～ 1851	天保5年 (1834)	爐雪	八代幸澄の子	番付等を通して同家の富商ぶりは全国に知られるようになっていった。一方で、社会状況は不安定となり、天保8年（1837）の大塩平八郎の乱による火災（大塩焼）によって本邸、隠居所、分家2軒、別家11軒が被害を受けている。
十代	善右衛門幸富	1841 ～ 1920	嘉永4年 (1851)	爐酔 香雪庵 松筠亭	和泉町又右衛門家の分家・又七郎の子（母は八代幸澄の娘・友）	明治維新を迎え、幕藩体制のもと諸大名の蔵元や掛屋、大名貸を通して利を得ていた大坂の両替商は大打撃を受けることとなった。両替商・鴻池家の在り方も大きく変容し、明治9年（1876）には第十三国立銀行を設立し、頭取となっている。明治17年（1884）に隠居した。
十一代	善右衛門幸方	1865 ～ 1931	明治17年 (1884)	爐峰 爐好	十代幸富の子	明治17年（1884）に当主となった十一代幸方は前近代の経営からの脱却をはかるべく、井上馨らとともに鴻池家の経営の改革を断行していった。第十三国立銀行（のちに鴻池銀行）頭取、大阪倉庫社長、日本生命社長、大阪貯蓄銀行頭取などを歴任。明治44年（1911）には男爵に叙せられた。押絵、盆景、カメラ、浄瑠璃、扇面蒐集などの多様な趣味を持っていた。
十二代	善右衛門幸昌	1883 ～ 1954	昭和6年 (1931)		十一代幸方の子	昭和15年（1940）「松筠亭蔵品」と称し蔵品の売立を行い、鴻池家が江戸時代以来、蒐集・保管をおこなってきた美術品を世に出した人物。
十三代	善右衛門正通	1914 ～ 1995	昭和29年 (1954)		十二代幸昌の子	昭和19年（1944）より当主代行となり、太平洋戦争終結後の各種対応にあたった。昭和22年（1947）には今橋本邸を大阪美術倶楽部に譲渡している。
十四代	善右衛門統男	1942 ～ 2013	平成8年 (1996)		眞船清蔵の三男	昭和56年（1981）に十三代正通が事実上隠居したことに伴い鴻池家の当主代行となる。平成7年（1996）に阪神大震災に遭遇、翌年から所蔵品の寄贈や資料室の整備を行い、同家伝来の文化財の保存に尽力した。

『鴻池家年表』をもとに編集した。